

1980年代中頃のわい化 ‘ふじ’ 園の収量

研究のねらい

1980年代中頃には、青森県内で先陣を切って栽植されたわい化リンゴ園が成木化したが、当初期待されたような成果が上がっていない園地も少なからずあった。そこで、わい化園の収量実態を知ると共に、それに影響を及ぼす要因を解析した。

研究の成果

青森県津軽地方において台木M.26（マルカイト付きも含む）、品種‘ふじ’、樹齢8年生以上、栽培面積10a以上の条件を満たす園地23か所を選定し、各園地とも欠木や障害樹も含め無作為に抽出した30樹を対象に、1984年から3か年、収量及び木の生育状況などを調査した。

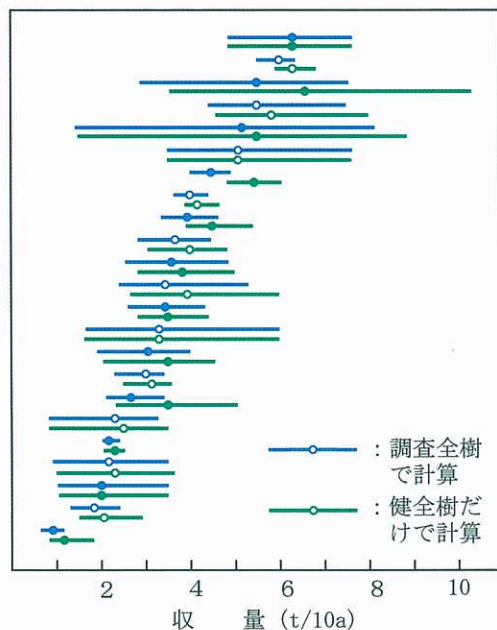
3か年平均の10a当たり収量（欠木や障害樹も含めた調査全樹から算出）は、園地による差が大きく、最も少なかった園地では0.9 t、最も多かった園地では6.3 tで、全園地平均では3.6 tであった。

10a当たり収量（この場合は欠木や障害樹を除いた健全樹だけから算出）に密接に関与する要因として、10a当たりの側枝（枝齢2年生以上で長さ50cm以上の枝）本数が見い出され、側枝本数が多いほど高収量となる傾向が示された。また、10a当たりの側枝本数を多く確保するためには、できるだけ栽植密度を高くし、最上位側枝発出高をある程度高くして樹冠の厚さを大きくする必要があることも示された。



3か年平均の10a当たり収量が最も多かった園地の状況
（弘前市下湯口、M.26自根、1984年当時11年生、4m×2m植え）

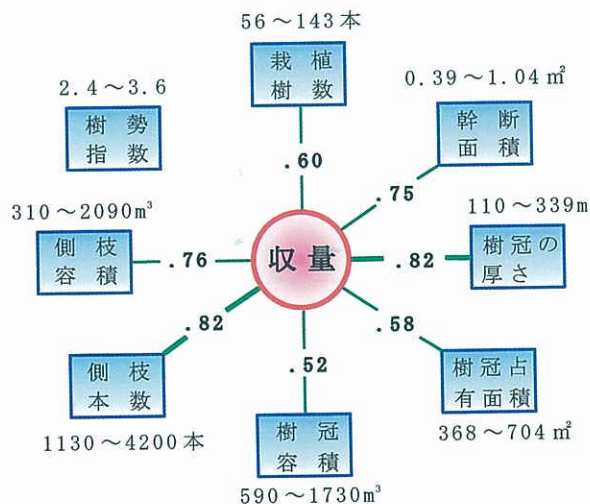
主要な試験データ



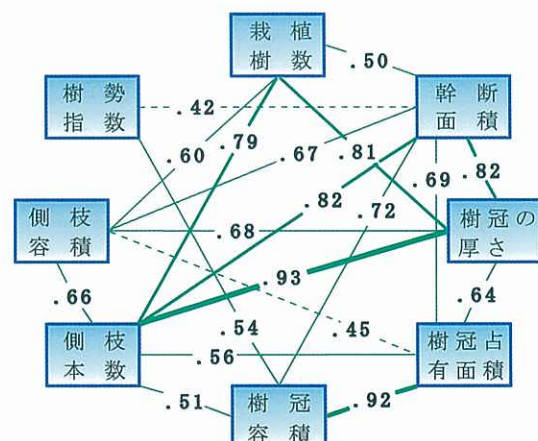
注1：丸印は3か年の平均、横線は変動範囲を示す。

2：本図では調査全樹から算出した収量の多い順に園地を並べた。

第1図 10a当たり収量の3か年平均と変動範囲



第2図 10a当たりの収量と樹体生育量との間の相関関係



第3図 10a当たりの樹体生育量相互間の相関関係

注：第2及び3図の数値は相関係数又はデータの範囲で、5%水準で有意差が認められた組み合わせのみを線でつないだ。また、これらは健全樹のみのデータで計算した。

発表資料

1. 外崎武範 (1987). わい化‘ふじ’の収量実態. 青森農業38 (2): 44-47.
2. 外崎武範ら (1990). 青森県におけるリンゴM.26台‘ふじ’の収量と木の大きさ. 青森りんご試報 26: 135-157.